

瓢 塚 古 墳

測量調査報告書

1 9 7 9

掛川市教育委員会

瓢 塚 古 墳

測量調査報告書

1 9 7 9

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は静岡県掛川市吉岡字女高1153-1, 1153-5に所在する瓢箪古墳の測量調査報告書である。
2. 測量調査は掛川市教育委員会が実施したものであり、現地調査には静岡県文化財審議会委員斎藤忠博士の指導を得、静岡県教育委員会文化課植松章八、平野吾郎、掛川市教育委員会社会教育課岩井克允が担当して実施した。又現地調査および資料整理には文化課佐藤達雄の応援を得た。
3. 本報告は調査に参加した者が分担執筆した。

分担は下記のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章1～3、第Ⅴ章	平野吾郎
第Ⅱ章	岩井克允、平野吾郎
第Ⅳ章4	植松章八

4. 本書の編集および本書に使用した図の作成は佐藤達雄、平野吾郎がおこなった。

目 次

I 調査の目的および調査に至る経過	1
1. 調査の目的	
2. 調査に至る経過	
II 古墳の位置および環境	1
1. 位置と地形	
2. 周辺の遺跡	
III 調査の経過	4
IV 調査の概要	6
1. 地形測量	
2. 墳丘測量	
3. 周溝および外部施設について	
4. トレンチとその断面観察について	
V ま と め	23
1. 墳丘について	
2. 古墳の年代および性格について	

挿 図 目 次

第1図 瓢塚古墳の位置および周辺の遺跡	3
第2図 瓢塚古墳周辺環境図	5
第3図 瓢塚古墳周辺地形図	7
第4図 瓢塚古墳墳丘図	11
第5図 墳丘計測図	13
第6図 A～Fトレンチ実測図	19
第7図 採土跡土層断面図	21

図 版 目 次

- 図版 I 周 辺 景 観 (南西から)
周 辺 景 観 (東から)
- 図版 II 古 墳 遠 景
古 墳 近 景 (東から)
- 図版 III 古 墳 全 景 (西から)
- 図版 IV 前 方 部 (採土跡)
後 円 部 (採土跡)
- 図版 V 墳 頂 部 (発掘址)
墳 頂 部 (発掘址埋戻し後)
- 図版 VI 前 方 部
前方部墳丘断面
- 図版 VII C トレンチ
B トレンチ
- 図版 VIII D トレンチ
E トレンチ
- 図版 IX A トレンチ
- 図版 X F-2 トレンチ
F-1 トレンチ
- 図版 XI F-1 トレンチ
F-3 トレンチ
- 図版 XII F-2 トレンチ
F-1 トレンチ
- 図版 XIII 墳頂部発掘址断面
埴輪出土状況 (F-1 トレンチ)
- 図版 XIV 調査風景 1
調査風景 2
- 図版 XV 伝瓢塚古墳出土変形獣文鏡 その 1
伝瓢塚古墳出土変形獣文鏡 その 2

I 調査の目的および調査に至る経過

1. 調査の目的

太田川の支流である原野谷川の流域には前方後円墳、大型円墳等古式の古墳が数多く存在していることは識者の間では早くから注目されていたことである。又西岸の和田岡原一帯には弥生式土器、土師器の散布地が何ヶ所知られており、遺物の採集あるいは分布調査がおこなわれていた。(註1)しかしこの地域の遺跡群が早くから知られていた割にはまとまってその内容が紹介されたものは少なく、調査の概要が公表されているものは近年では春林院古墳(註2)、宇洞ヶ谷横穴群(註3)、あるいは本村横穴群、岡津横穴群(註4)等数える程しかない。比較的早くから茶畑として開墾されていたこの地域一帯が近年茶園の改植期に入り急激にその様相を変化させ始め傾斜地の修正、田地返し等により、遺跡を破壊する例が増加してきた。こうした状況を受けて、掛川市教育委員会ではこの地域の大型古墳群の保存を図ることにし、最初にこれらの古墳の規模等を含め基礎的な資料を作成することになった。原野谷川流域の古墳群のうち各和金塚古墳は昭和52年度に中部電力による送電線鉄塔の建替に伴って測量調査がされており、今年度は瓢箪の墳丘測量を実施することになった。

2. 調査に至る経過

掛川市教育委員会による基礎資料作成の計画とは別に、静岡県教育委員会では県内の大型古墳を県あるいは国史跡として指定し、保存する計画を樹て、その始めとして、古墳のリストアップと従来の調査及び関連資料の整理をおこなってきた。こうした作業の一環として和田岡原古墳群の現状把握と資料収集の作業をおこない県文化財審議会委員の現地踏査をおこなった。県、市教育委員会の協議の結果、春林院古墳から各和金塚に至る4基の大型古墳を県あるいは可能であれば国の史跡として保存してゆく事で基本的な考え方が一致し、文化庁にも史跡指定申請の意向を伝えると共に基礎資料の作成を始めることになった。昭和53年度は当面市が計画している瓢箪古墳の測量調査を実施することにしたが、掛川市教育委員会では今年度学校建設あるいは採土工事に伴う事前の発掘調査が続いており、独力で瓢箪古墳の測量を実施することが困難な状態であったので、県教育委員会でも現地調査の応援をすることになり、植松章八、佐藤達雄、平野吾郎の3名が参加することになった。従って調査は前記3名の他掛川市教育委員会岩井克允氏と計4名で実施することになり、他に渡辺康弘、野口英生、岩井和志の3氏の応援を得た。

II 古墳の位置および環境

1. 位置と地形

瓢箪古墳は東海道線掛川駅を起点に掛川一新所原間の北邊を走っている二俣線に乗り、次の遠江桜木駅あるいは原野谷駅で下車し、徒歩で40分程の距離を西に進んだところにある。掛川駅から直線距離にして約6キロ程北西にあたり、行政区画は静岡県掛川市吉岡字女高1153番地にあたる。

この地域では北邊の山地から続いた丘陵が太田川の支流を成す各河川によって解析され細い丘陵を形成しているが瓢箪古墳はそれらのうちの1つ和田岡原の東端、原野谷川を見下す台地の端部に

占地しており、流域の沖積平野を一望の下に納めることの出来る位置である。古墳は海拔40メートルの台地を基盤にしており水田までの比高は20メートル程である。

2. 周辺の遺跡

原野谷川は袋井市北原川に源を始し、磐田市鎌田で大田川に合する全長20キロに及ぶ大田川の有力な支流であり、その流域は巾1キロ～1.5キロ長さ12キロに及ぶ沖積平野を形成している。この平野をめぐる地域には縄文時代以来各時代の遺跡が多数知られており、なかでも和岡原には多数の古墳が存在している。瓢箪古墳をとりまく西岸地域では瓢箪古墳より1キロ程南に5世紀初頭と目される大形の前方後円墳である各和金塚が存する。この流域における最初の首長墓と目される古墳である。全長60メートルをこえ、円礫による堅穴式石室を内部主体とするらしい。石室内より大刀、剣、刀子、鉄鏃、三角板革製の短甲等が出土している。

金塚古墳より南側に1.5キロ程下った袋井市北原川に宇佐八幡神社古墳がある。台地の東端部の杉林の中にある全長30メートル程の規模を有する南向の小形の前方後円墳である。

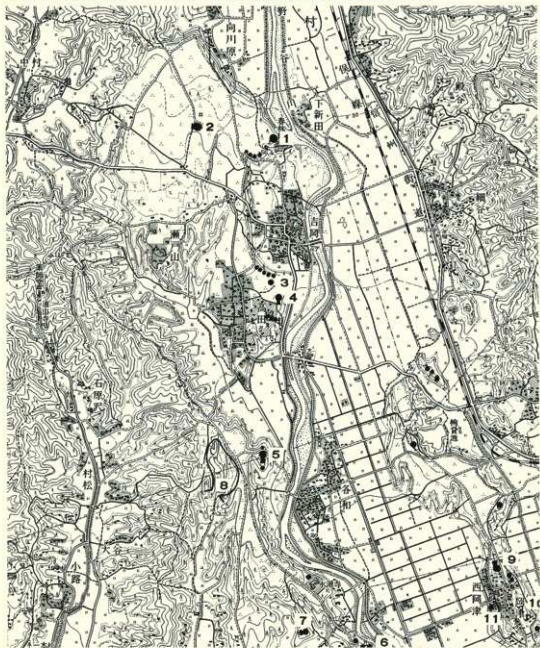
宇佐八幡神社古墳より300メートル程西側に西向の前方後円墳である権現山古墳がある。やはり全長30メートル程の小形のものであり後期に属するものかも知れない。さらにその西側の谷には大規模な横穴群として知られる菅ヶ谷横穴群が存している。

各和金塚古墳から宇佐八幡神社古墳にかけて永源寺古墳、石野形古墳等に代表される小形の円墳が点々と存している。未調査であり内容は不詳であるが後期の古墳とばかりは言えないものが多い。

瓢箪古墳より1.2キロ程北西に進んだ中に吉岡大塚古墳がある。台地の縁より500メートル程内側に入ったところにあり、未調査であるが、前方部の低く短い、いわゆる帆立貝型の前方後円墳である。墳輪を有しておりやはり5世紀に属するものであろう。又吉岡大塚古墳の東側で原野谷川を望む台地の縁に春林院古墳がある。径30メートル高さ5メートル程の大形の円墳で墳丘には帯状に2段の葺石をめぐらしている。粘土礫による主体部をもち5世紀初頭と目される古墳である。又春林院古墳の近くには後期の古墳が3基程存在している。さらにこの上流には幡鎌、寺島、里原と点々と小円墳が存在している。

原野谷川東岸の地域では上流に長福寺古墳群あるいは本郷の堂山古墳群等の円墳群があるが、これらと共に長福寺下横穴群、宮坂横穴群、古銭横穴群さらに楠木ヶ谷横穴A群・B群等多数の横穴が存在している。さらに下流に下って岡津原に上る手前の高代山あるいは岡津原にも円墳群が存在している。神明塚古墳、岡津八幡神社古墳に代表されるように比較的規模も大きく、しっかりしており、中期後半～後期初頭に位置付けられるものが多い。又この岡津原にはすでに削平されており、墳形は不明であるが、半円方格帯神獣鏡を出土した岡津奥の原古墳があり、あるいは前方後円墳ではないかと推定される。岡津原の南側には岡津横穴A群・B群が存し、さらに逆川を渡った南側、掛川市領家、高御所の地域に本村横穴群、大谷代横穴群、押出横穴群等大規模な横穴群が広がっている。これらに隣接して子洞ヶ谷横穴、山麓山横穴等単独で存在する大形の横穴があり、年代も6世紀中葉と推定でき、この横穴群の初源を示すものである。逆川流域ではさらに東側に向って横穴群が点々と存在している。又東海道線を走った北側の上垂木にはこの流域で最大級の規模を持つ飛鳥横穴群が存在している。

原野谷川中流域におけるこれらの古墳群のあり方を整理すると5世紀代は中期型の古墳である各和金塚古墳、吉岡大塚古墳、岡津奥の原古墳および今回調査した瓢塚古墳等大形の前方後円墳が続いているが、5世紀末～6世紀に入ると古墳は急激に小形化し、数も少なくなり各地で見られるような爆発的な数の古墳による群集墳の形成はないようである。その代りとても言うように6世紀中頃より横穴群が形成され始め、東海地方最大の横穴群密集地域となっている。



第1図 瓢塚古墳の位置および周辺の遺跡

- | | | | |
|-----------|-------------|------------|---------------|
| 1. 春林院古墳 | 4. 瓢塚古墳 | 7. 惟現山古墳 | 10. 岡津横穴群A,B群 |
| 2. 吉岡大塚古墳 | 5. 各和金塚古墳 | 8. 菅ヶ谷横穴群 | 11. 西岡津古墳 |
| 3. 行人塚古墳 | 6. 宇佐八幡神社古墳 | 9. 岡津奥の原古墳 | |

Ⅲ 調査の経過

調査は墳丘の測量および古墳周辺の地形測量、墳丘裾の確認、葦石、埴輪等の外部施設の有無を把握するため、墳丘の一部にトレンチを設定しての発掘と3点を中心におこなった。さらに追加し、従来の調査による出土品の整理検討を予定したが、調査期間等の制約により不充分であった。今後の課題としたい。現地調査は昭和53年9月1日より墳丘上の雑木の伐採より始め、10月下旬にトレンチの埋戻しを終了し、さらに54年3月に整理を含め全ての作業を完了した。

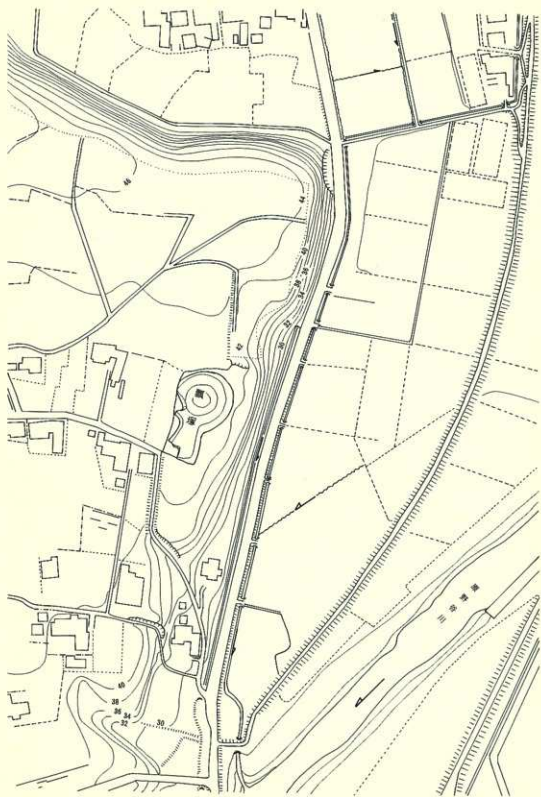
以下調査の経過を簡単に述べることにしよう。台地の東端に営まれている古墳は西、北、南の三方は茶畑に囲まれているが、墳丘および原野谷川に面した東側斜面全体は杉林になっている。さらに長い間山林の管理がされていないため、雑木、下草あるいは杉の下枝等がはびこり、墳丘に登るのも大変な状態であった。従って最初は墳丘全域の伐採、下草刈から実施することにしたが、雑木等は伐採した後墳丘の外に運び出すことにしたため、意外に時間がかかり、作業終了に1週間を要した。続いて墳丘全域および、周辺部分に平板測量のため測点を設定することにし、墳丘上に12点を設定した。又墳丘が全長で60メートルを超す大形な古墳であるため、測量誤差を平均化するため測点は閉鎖トラバースとして誤差の配分の後、図化作業に入った。

測点の図化作業に平行して水準点の移動をおこなうことにした。水準点は国土地理院の1等水準点が2キロメートル程離れた県道脇に設定してあるため、それから測ることにし、往復3回の平均値を水準値として古墳後円部2点及び前方部に1点の計3点を設置した。

9月11日より墳丘の測量に入ることにし、後円部東側から50センチメートル間隔の等高線を入れることから始めた。墳丘の雑木を伐採してみると、古墳は当初予想したよりも良く整っており、原野谷川に面した東側が水田面まで急傾斜であることにより心配した墳丘東側の崩れはほとんどなさそうであることが明らかになった。しかし後円部西側及び、前方部先端西側が採土工事により一部崩されており、さらに前方部の先端が茶畑の開墾により多少削られていることが予想された。又後円部墳頂部分には2m×2mのはば円形の発掘坑が穿いており、静岡県史(註5)に記載のある明治30年代の発掘および以後の空堀によるものではないかと思われた。墳丘全体を50cm間隔の等高線測量をおこなった結果、古墳全長63m、後円部径37.8m、後円部高さ5m程であることが理解でき、又前方部と後円部の高さの差は1.5m程で、後円部が高いことが判明した。又墳丘全体も外見で観察したとおり、崩れや変形が比較的少ないことを確認した。墳丘の測量は一部残し9月14日ではば終了し、続いて墳丘周辺の地形の測量をおこなうことにした。地形測量は掛川市が市域全体の航空測量を始めているとのことであったので、広範囲の測量をする必要はなく古墳周辺の一部の測量に止めた。第10図に使用したものは市の作成した $\frac{1}{2500}$ の地図に古墳をはめこんだものであり、周辺地形を含め位置を明らかにするため作成した。従って古墳をはめ込んだ位置は必ずしも明確でない部分があり、いわば概念図である。

平板による墳丘測量に平行して9月14日より墳丘裾より古墳外部施設確認のため第4図に示すように全体に6本のトレンチを設定し発掘することにした。

トレンチの発掘は葦石等の存在が確認されれば、それで止めることにし、それ以下の発掘はしな



第 2 図 甌塚古墳周边环境図 (1 : 2500)

かった。従って墳丘築成の段階を検討するため、採土工事により崩壊している前方部西側および後円部西側の断面を清掃して断面の検討、作図をおこなった。各トレンチより葦石が検出され、特に前方部に設定したD、E、Fの3本のトレンチの葦石の状態は密であった。また各トレンチより土師器小破片あるいは埴輪の小破片が葦石にはさまったりあるいは上に乗った状態で検出された。しかしF1トレンチから出土した朝顔形埴輪と考えられるもの以外はいずれも小破片でありその器形を知り得るものはなかった。

後円部北東側に一部周溝の存在を思わせる地形があったので、この地域に設定したBトレンチを延長し、確認作業をおこなったが、明瞭な周溝と呼べるものはなく、断面でわずかに確認し得た程度の浅いものであり、それが周溝であるとすれば巾7m程のものである。

トレンチ全域に検出された葦石の清掃、実測は意外に手間どり、実測終了の目途がついたのは9月20日になってからであったが、Fトレンチ内で葦石の一部に段があるように見え、さらに葦石の裾の部分に埴輪片が散在したことにより、この位置に埴輪列の存在が予想された。従ってその確認のためにトレンチを南に延長しF2トレンチと呼んだ。さらに先のFトレンチ(F-1トレンチと呼ぶことにした)を西側に延長したところ、葦石と同じ円礫が積上げられ石堤の如き状態を示した部分があったが性格は不明であった。その延長を確認するために先のF-2トレンチに直行し、F-1トレンチに平行するF-3トレンチを設定し発掘をおこなった。拡張したF1~3トレンチの作業量が意外に多く、実測、写真撮影を終了したのは9月27日であった。

墳丘トレンチの発掘、実測に平行して墳丘崩壊部の清掃、墳丘断面の作成及び後円部発掘孔の清掃を始めた。また墳丘に設定した各トレンチも実測の終了した部分より埋戻しを平行しておこない、墳丘断面図の作成および埋戻しの完了したのは10月の下旬であり、これによって現地における全調査を終了した。

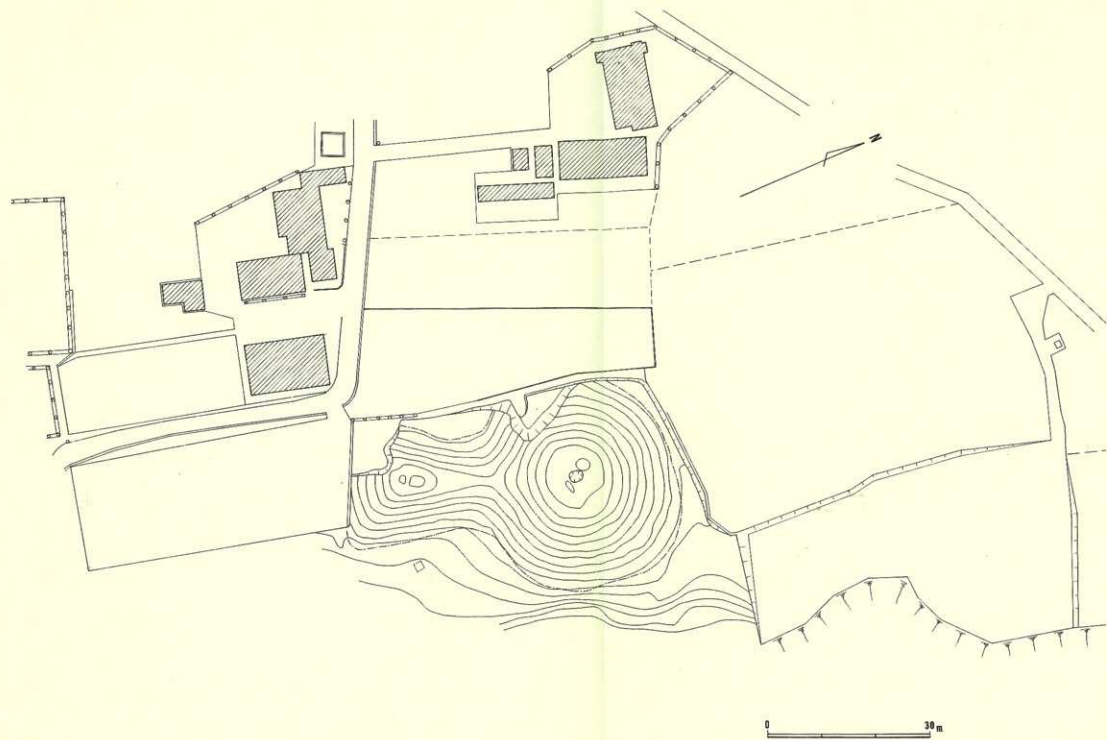
Ⅳ 調査の概要

1. 地形測量

地形測量は古墳周囲の畑地を中心に縮尺1:300で平板による測量をおこなった。先にも述べたように掛川市が全域を1:2500の縮尺で測量図を作成する予定であるので、杉林と竹藪の繁った原野谷川に面した崖の部分の実測は見送り、古墳の南、北、西の平坦部の実測をおこなった。第2図は市の作成した1:2500の地形図に古墳の位置をはめ、台地の縁の等高線と古墳のみを引き出したものである。古墳の位置については測点がなく、厳密には正確を期し難い。いわば古墳の位置概念図であるが、古墳と地形の関係を知らることができる。

鵜塚古墳の乗った和田岡原は東西1km、南北2kmの範囲に平坦面を持っており、南北に長く延びている。北側は掛川市西山で丘陵地帯に続き、南側は石原沢によって開析され、細い谷水田が形成されており、袋井市国本に続く丘陵地帯と離れている。台地は西側が高く、全体に西から東にかけてわずかに傾斜を示している。古墳はその台地の東端部、原野谷川流域の沖積平野を望む地域に位置している。

墳丘の測量によれば、古墳の裾による影響を受けていない等高線は海拔42.5mであるので、古墳は基



第3图 周边地形图

盤をほぼ海拔42mの高さにおいて造られているといえることができる。

2. 墳丘測量

測量図の検討

先にも述べたように、古墳は前方部西側および後円部西側が採土工事によって崩されている他は、墳丘全体に大きな変形はないようである。しかし前方部の先端は茶畑の開墾により少くとも1m前後の部分が削られている可能性が強い。

後円部墳頂部を海拔48mの等高線がめぐることよりそれを基に50m間隔の等高線を引くことから測量を始めた。示された等高線は後円部ではほぼ正円形を描き又その間隔も墳頂部より裾に至るまではほぼ等しい。同様の傾向は前方部にも及んでおり、等高線の間隔はほとんど差がない。墳丘西側の裾の一部を除いては古墳中軸線を中心にきれいに左右対称を成している。この点からも墳丘外側の崩壊あるいは変形は少ないことを知ることができる。これはトレンチの調査で見えるように葺石を墳丘全体に敷いていることにより封土の流出等がさけられたためと思われる。

後円部墳頂と思われる平坦な部分は海拔48および48.5mの等高線の引ける部分にほぼ一致しており、径3m程の広さである。中央部に大きく発掘坑があげられており、その排土が積まれている事より、一部に48.5mの等高線の引ける部分があるが、ここでは問題にする必要はない。又排土中には粘土が多量に含まれており、発掘時の調査により「粘土層」であったとする静岡県史の記載を裏付けている。

後円部の前面すなわち前方部に続く区域で等高線の中が広がり、前に出ている部分がある。いわゆる後円部突出部と考える事が出来るかも知れない。前方部の稜線は巾1m足らずと狭く、前方部に向って開いている。又長さは約10m程が平坦になっている。

前方部の頂部にはかつて小さな祠が建てられており46.5mの等高線の示す南側のコブは祠建立時の積土あるいは基礎と考えることができ、さらに祠の裏には溝が掘られている。これらの影響により墳頂部は多少変形している事が考えられる。しかしその影響は最大限考慮しても46mの等高線の示す位置までは及んでいないものと思われる。

墳丘裾をめぐる等高線は前方部と後円部ではかなりの差がある。前方部先端は畑地で削平されているので、前方部東側の等高線を観察すると、43mの等高線は南から西向に折れているのが観察できる。又41.5mの等高線はやや曲り始めているが、この地域は畑の地境の溝および溝を掘りあげた礫等により土堤状になり、観察不能であるが、本来はおそらく南に曲っていたものであろう。従って前方部先端部分の墳丘裾は42.5mの等高線の示すところと考えて良いようである。又この位置はEトレンチによる葺石の末端ともほぼ一致する。ところが前方部墳丘裾と思われる前記42.5mおよび43mの等高線は後円部の裾はめぐらず、そのまま自然の丘陵に消えている。後円部裾をめぐるのはそれより高い44mあるいは43.5mの等高線である。43.5mの等高線は北側に畑に切られており、後円部を一周めぐるか否か詳細は観察不能である。後円部墳丘の外見上の裾は44mの等高線と考えて良いものと思われる。従って後円部裾を示す43.5mの等高線と前方部裾と考えられる42.5mの等高線の間には1mの差がある。これは古墳の立地する基盤の傾斜の示す差と言うことになる。

古墳の計測値を一部推定、復元も加えて示すと以下のとおりである。

全 長	63 m
後 円 部 径	38 m
前 方 部 巾	25.2 m
後円部高さ	5 m
前方部高さ	3.5 m

前方部と後円部の差は 1.5 m ということになるが、盛土部分の高さについて見れば、古墳の基盤の傾斜部分 1 m を追加し前方部は 4.5 m の高さということになる。

古墳の墳形を検討したが、その特徴を整理すれば、最初に注意されることは墳丘の保存状態が良く、封土の崩壊、流出等による墳丘の変形が少いことである。第 2 は後円部の径 38 m に対し前方部巾は 25.2 m であり、後円部径が大巾に大きく、又高さも後円部に比較し前方部は 1.5 m 程低い。従ってこの古墳は後円部に比較し前方部が小さく、くわば前方部が未発達であるということができよう。このことは中期の古墳が前方部の発達が著しいとする一般の現象と比較し注意されることである。これについては後に再度触れたい。

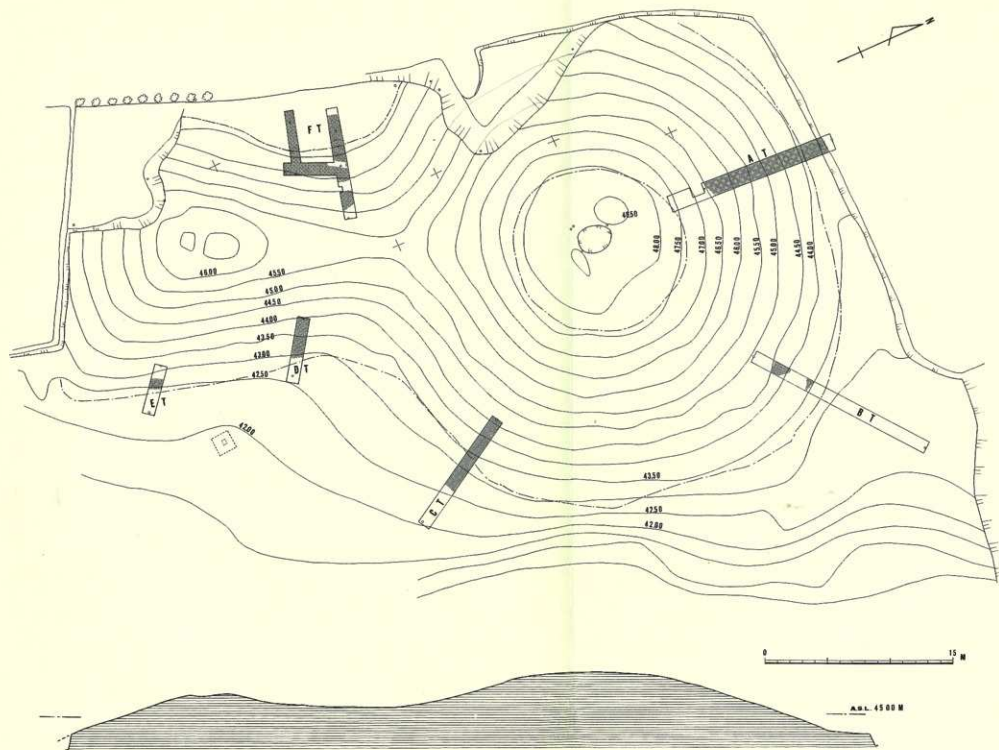
古墳平面企画の検討

墳丘測量による古墳の規模、墳形の特徴を述べてきたが、次にこの古墳の平面企画について検討してみよう。前方後円墳の造営企画の研究は種々おこなわれているが、後円部径の $\frac{1}{6}$ が古墳造営時の墳丘長に関する基礎単位であるとする上田宏範氏の研究（註 6）に従って瓢箪古墳の場合について検討することにしよう。

外見上の墳丘裾より検討した後円部の径を 38 m とすると、後円部径 $\frac{1}{6}$ の一単位はほぼ 6.3 m と考えることができる。

後円部の中心点 O を等高線の示す円の中心に求めまた前方部の頂点に P を求め、P・O を結ぶ線を古墳の中軸とし、後円部裾を示す円との交点に C を求める。PC = 12.6 m、BC : PC = 6 : 2 とと考えることができる。また P より前方部の稜線を通る線と前方部東側の裾を通る線の交点 Q を求め、さらに前方部西側は採土工事により破壊されているので、PQ と中軸線 PO を挟んで対称に P'Q' を求める。また前方部先端が畑地で削られているので、Q'Q' を結ぶ線と PO の延長の交点に D を求めると PD も 12.6 m に極く近い数値となる。これらによって第 5 図に示した測点を得ることが出来た。その結果 BC : CP : PD は 6 : 2 : 2 ということになる。また QD、Q'D と PD も極く近い数値になり従って QD : Q'D : DP : BC も 2 : 2 : 2 : 6 ということができ、PQ'Q' で囲まれた前方部は正三角形を呈することになる。しかし前方部の巾は後円部径 $\times \frac{1}{6}$ の数値では完数を得られないことが、上田、甘粕両氏の研究（註 7）で明らかにされているので、ここでは前方部の先端が不明確であることも考慮し、参考値に止めておきたいと思う。

後円部のクビレ部の位置を求めると前方部の点 D を中心に半径を前方部長さ $+ \frac{1}{2} \times$ 後円部径 $\frac{1}{6}$ の長さにとった円と後円部の裾を示す円の交点に近いものと思われる。この交点を求め Q および Q' からの線を引きと前方部西側に設定した F T に示された礫群の終りとはほぼ一致する。しかし東側 DT に示された墳丘束端からだいたい外側に出ることになるのでここでは保存状態の良い墳丘東側の裾か

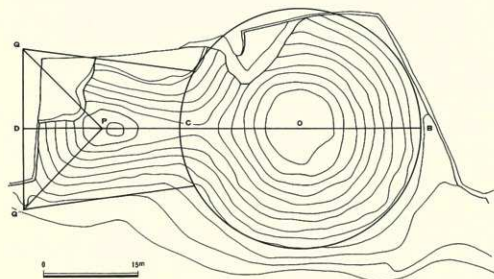


第4圖 墳丘圖

ら延びる線と後円部裾を示す円との交点にクビレ部の位置を求めた。(註8) それは前方部長+ $\frac{1}{2}$ ×後円部径 $\frac{1}{6}$ が示す点より少し短い、ほぼそれに一致していると考えて良いようである。

以上のような墳丘各測点間の比を得たのであるが、これを遼江の他の中期の古墳と比較して見ると、天竜市光明山古墳(註9)小笠町舟久保古墳(註10)磐田市稲荷山古墳(註11)等いずれもB C : C P : P D は 6 : 2 : 3 の比率を示し、前方部の発達が著しいことがわかる。また磐田市堂山古墳はB C : C P : P D の比が 6 : 3 : 3 の比を示すものと思われる。6 : 2 : 3 の比を示す古墳は東海地方にも良く見られるものであり、中期～後期初に多いものようである。遼江地方で代表的な前期の古墳である磐田市松林山古墳(註12)は 6 : 2.5 : 2.5 の比を示しており、瓢箪古墳の示す 6 : 2 : 2 の比率を持つ古墳はこの地方においては極めて例の少ないものであることを知ることができる。瓢箪と同じ比率を示すものは上田氏によれば景行陵古墳、大和天神山古墳、大阪松岳山古墳等があげられており、前期～中期初の古墳に多い墳形であることが知られる。従って墳丘の平面企画の検討からは瓢箪古墳の年代は比較的古いと考えることができよう。しかし内部主体あるいは出土遺物等よりその年代を大和天神山古墳、松岳山古墳等の古墳に直接平行させることはできないと思われるので、それより若干降らせてその年代を中期前半に求めることが可能であろう。

平面企画の検討より、瓢箪古墳は当初考えられていたよりも古く、中期前半の年代を与え得る古墳



第5図 墳丘計測図

であることを見てきたが、また他方古墳の平面企画の類似が即年代的な古さを示すものではないとする見方も可能であり、この地域の他の前方後円墳の平面企画を検討し比較する必要があると思われる。この地域の前方後円墳のうち、瓢塚の南方に存在する各和金塚古墳の平面企画を検討すると、BC:CP:PEの比が6:1:2の比を示すことが判る。6:1:2の比を示す古墳は上田氏によればA型式に属し、神功陵古墳、成務陵古墳等前期の古墳に見られる比である。しかし各和金塚古墳は円礫による竪穴式石室を内部主体に持ち、角綴三角板短甲、剣、大刀等の副葬品によって5C初頭の古墳と考えられるものである。(註13) 従って平面企画の類似が年代の古さを示すものとは考えられず、さらに同じ台地上に立地する吉岡大塚古墳が前方部が極端に小さく、あるいは帆立貝型の墳丘を持つのではないかと言われていること等を考慮すると前方部が小さいということが和田岡原に存在する古墳の極立った特徴といえることができるかもしれない。中期～後期の前方後円墳における前方部が小形化する現象を大和政権の地方豪族に対する古墳造営の規制の結果であるとの理解もあるが(註14)一地域における一系列の首長墓と考えられる前方後円墳が3基共規制された古墳であると考えることには多少無理があり、あるいは先に述べたように後円部に比較し前方部が小さいことが和田岡原の古墳群の極立った特徴といえることも知れない。そうだとすればそれはこの地に古墳を営んだ集団の造墓における伝統の反映と見る事が可能であろう。いずれにせよ、これは各地域における系列的な首長墓の検討の作業が必要であり軽々に結論を得られるとは思えないのでここでは和田岡原の前方後円墳におけるそうした現象を示すに止めたい。

3. 周溝および外部施設について

トレンチの調査の結果では周溝の存在は明確ではなかった。しかし墳丘測量時の観察によれば、後円部後側東北隅に周溝の存在を思わせる低い部分が帯状に残っている。またこの地域に設定したBトレンチの観察によれば極く浅い周溝の存在を想定することは可能であり、前記の低い部分がそれに当ることを知り得た。従ってこれを周溝の一部と考え、巾7m程の浅い周溝がめぐっていたことを認めておこうと思う。

葺石は墳丘全面に掌大から掌大の山礫を使用して葺かれていた。トレンチの観察によれば、一部に上下2段に帯状に葺いてあったかに見える部分もあったが、明確でなく、墳丘全体に葺いてあったと観察される。後円部東側のGトレンチでは葺石は墳丘裾の想定線を3m程越え、下まで存在している。同様の現象はDトレンチでも観察することができた。これは古墳の規模を見る方向によっては実際以上に大きく見せるための工夫ではないかと思われる。この古墳を築造した人々の生活の場が原野谷川流域の沖積平野部であることを考慮すればこうした推定は十分可能なことであろう。

4. トレンチとその断面観察について

すでに述べたように、本墳は全長63mを測る前方後円墳であるが、本測量調査ではより正確な墳丘裾部の確認のためにトレンチ調査を採用することとした。トレンチはA～Fと命名された6本で、墳丘全面に植林された立木やその他の条件に制約されたが、後円部後側に2本、後円部東前方に1本、前方部東側に2本、前方部西側に1本を設定した。また、後円部西側と前方部前端西半部には、かって土取りをうけた部分があったので、その断面を清掃観察することによってトレンチにかえた。墳頂部発掘部についても同様であり、それらの観察をあわせ記述する。

A トレンチ

後円部北側で長軸方位からわずかに西側に設定されたトレンチである。当初の設定は1.5 m巾で長さ11 mほどであったが、墳頂方向へ3 mほど延長して14 mを測った。また、墳丘裾付近から外側へも20 mほど設定したが、B トレンチの調査によって周濠状遺構は確認しにくい状況が明らかとなったので、調査から除外した。

本トレンチの墳頂側から3.2 m前後の位置すなわち海拔46.50 m付近から 墳丘裾部付近までの約10.3 mほどの範囲にはほぼ全面に葦石がみられた。拳大から掌大の礫を乱雑に敷いた状態で、墳頂側3.5 m前後、裾部側3.9 m前後の範囲にきわめて濃密で、その中間2.9 mほどは比較的粗薄であった。こうした状況からすれば、その中間部の粗薄な礫群は上部からの転落とみて、上下2段にめぐる帯状葦石を推定することも可能かも知れないが断定は避けておこう。また、墳丘裾部の濃密な礫群は、かなり厚く積み重なった状況にあって、上部からの転落が確実といえた。いずれにしても、本調査では、葦石を除去して墳丘上面を確認する方法は採用しないこととした。

断面観察によれば、表土層は約10 cm前後で、その下部に15~30 cm前後の褐色土がみられ、その下部が葦石面および墳丘盛土となっていた。

観察された墳丘上面は、本トレンチ上端から3 m前後で、墳頂部から連続する傾斜がやや緩やかに変化して墳丘裾部にまで達する状況がみられた。こうしたいわば逶迤点ともいべき墳丘上面の変化は、そこから上位が墳頂部をつくり、下位に葦石を設けるという相違が認め得るものであった。また、本トレンチの上端部2 m前後の盛土は黄褐色土からなっていて、黒色土で築成された墳丘のなかで際立った特徴がめだった。

墳丘裾部については、本トレンチ下端から2 m前後上方で、墳丘上面の傾斜がかなり平坦にちかく変化する位置をそれと認めておく。こゝから下側の礫群については、上部からの転落によるものとみること可能であるが、F トレンチで確認された例と同様に裾部外側に敷かれたものと判断してよさそう。

B トレンチ

後円部北側で、長軸方位からやや東側にずれて設定されたトレンチである。設定の目的は、墳丘裾部と周濠の確認であり、巾1 m・長さ15.5 mを発掘した。

本トレンチにおいては、拳大から掌大の地山礫よりなる上下2群の葦石群が発見された。上端から1.6 mほどの位置すなわち海拔44.50 m付近から約1.8 mほどの範囲を有する礫群と、上端から5 mほどを測る海拔43.50 m付近に帯状にみえる小礫群とである。

断面観察によれば、第1層は表土層で黄褐色を呈し層厚20~30 cmを測る。第2層は黒色土で5~20 cm前後で一般に薄く、その下部に葦石および墳丘盛土がみられる。また、トレンチ上端から6.7 mすなわち海拔43.0 m付近に墳丘盛土の末端と観察できる箇所があって、それは前述した帯状の小葦石の下方1.5 mほどにあたる。この墳丘末端部から下方にかけては、地山がわずかに低くなる傾向をみせている。これを不明確ではあるが、一応周濠と認めておいた。さらにこの上部には表土層との間に2層からなる黄褐色土を主体とする堆積土があって、墳丘盛土が流失して堆積したものと認められた。

C トレンチ

後円部東側前方に設置されたトレンチで、巾1m・長さ10mを、墳丘裾部の状況確認の目的で調査した。

本トレンチにおいては、その上端から6.0m前後までに及ぶかなり濃密な礫群が連続し、葺石と認められた。礫は拳大から掌大の地山礫で、乱雑な敷設法も共通していたが、上端から3.5m付近に見方によっては空白部となし得る状況もあって、Bトレンチで観察された帯状葺石の可能性をまったく否定することもできない。

断面観察によると、第1層をなす表土層は10~20cmで、第2層は黄褐色土を主体として10~20cmとなる。その下面に葺石面および墳丘盛土がみられる。また、葺石の末端から下方は地山となっていることから、ここを墳丘裾部と認めた。

D トレンチ

前方部東側奥よりに設定したトレンチで、墳丘裾部の確認を目的として、巾1m・長さ4.9mを調査した。

本トレンチにおいては、上端から3.3m付近まで、ほぼ全面的に拳大から掌大の地山礫が乱雑に敷かれて、葺石と認められた。本葺石も、上端から2m付近にわずかな空間をもつが、それによって上下に区分し得るほどの状況ではない。

断面観察によれば、第1層は表土層で10~20cmほど、第2層は黄褐色土層で10~15cmほどあり、その下部が葺石面および墳丘盛土となっていた。また、葺石の末端から下方は地山をなしていて、ここが墳丘裾部をつくることは明らかであった。

E トレンチ

前方部東側の前よりに、墳丘裾部の確認をめざして設置したトレンチで、巾1m・長さ4mを測った。

本トレンチにおいては、その上端から1mほどすなわち海拔43.0m付近から0.9m前後の範囲に葺石が認められた。拳大から掌大の地山礫やその乱雑な敷き方も他のトレンチに共通する状況であった。

断面観察によれば、第1層は表土層で5~20cmほど、第2層は黄褐色土で10~20cm前後であった。その下面が葺石および墳丘盛土となるが、葺石面上部の墳丘盛土部分はやや緩やかな傾斜を有し、それが葺石面で比較的急傾斜をつくって、その末端が墳丘裾部となり、それから下方は地山となっていた。

F トレンチ

前方部西側の奥よりに設置したトレンチである。当初は北側のトレンチを巾1m・長さ8.5mで発掘したが、その中央部付近から埴輪大片が出土するとともに、巾50~60cmで高さ30cm前後を測る石堤状遺構が発見されて墳丘裾部をつくっている状況が確認されたので、その埴輪の配列の有無をみるために長軸方位に併行して巾1m・長さ4mほどのトレンチ、石堤状遺構の延長をみるために長軸方位に直交して南端側に巾0.6m・長さ4.2mほどのトレンチをそれぞれ拡張した。これらをF1~F3トレンチと呼んだ。

F1トレンチにおいては、その上端部から1m前後の空白部において、海拔47～47.5mほどの位置に、拳大から人頭大の礫を敷いて巾60～70cmほどの範囲の礫群があり葎石と認められた。また、その下方には1.2m前後の空白があって、トレンチ上端から3m前後を測る海拔44.0mほどから、5.3mほどの範囲を有する礫群がある。本礫群はその上端部の1mほどの範囲には拳大の礫をかなり厚く密に敷き込んだ状況でその末端部に埴輪大片がみられた。ところがその下方はわずかな空白において、やや大きな礫を平面的に敷いた粗薄な様相であり、そのほぼ中央部で海拔43.5m付近の位置に石堤状遺構が存在した。

F2トレンチにおいては、さきに述べたやや小さな礫を密積した状況で、とくにその末端部分にわずかな空白部をつくる状況が注目された。F3トレンチにおいては、礫の状況はF1トレンチ下方部と同様であり、中央部には石堤状遺構が確認された。

断面観察によれば、第1層は表土層で15～30cmほどの厚さをもち、第2層は黄褐色土からなって、その下部に葎石面および埴土盛土がみられた。ところが、この第2層は石堤状遺構の存在に影響されて部分的には2～3層に分層し得る変化が観察できた。埴土盛土面における傾斜は、上方から石堤状遺構までは一定で、そこから下方がやや平坦化して地山に連続していた。この石堤状遺構の下方には葎石がみられて、それはF1トレンチでは2.4mほどが図示されているが、トレンチ壁外の様相からすればさらに若干の延長がみられるようである。同様に、F3トレンチでは、末端までの約2mほどの範囲全面に葎石群が存在し、その限界を把握することはできなかった。

以上の状況を整理しておくと、本葎石は、まず海拔47～47.5m前後に帯状をなす礫群があり、その下方にはやや小さな礫を厚く敷いた礫群がみられる。海拔43.5～43.0m付近には石堤状遺構が確認されて埴土掘部と認められるが、その上下ともやや粗薄な葎石が存在する。こうした石堤状遺構とその外側の葎石の存在は、本トレンチのみに確認される特徴として注目されてよい。

前方部採土跡

本採土跡は、前方部西南隅の埴土を南北8m・東西9m前後の範囲にわたって、ほとんど地山に達するほどに土採りされたものである。

本調査では、これらの断面を清掃・観察したが、東西・南北壁ともに共通した様相がみられた。基本的には、地山のうえに、褐色土・黒色土・暗黄褐色土と識別された3層をそれぞれ多くは20～30cmの厚さで敷き込んで、大略平坦にちかい盛土とし、これに比較的小ブロックに識別し得る盛土を積みあげる方法によっていた。ここでは、外縁ちかくから埴土中心部へ、さらに上部というくり返しによって埴土が築成されていたものと観察された。

また、前方部南端すなわち前端は、耕作によって若干の破壊をうけているようで、地山から60cmほどの高さを有する埴土末端が確認されている。現状の土層図南端から数mほどで堀にいたるものとみなし得よう。

葎石については、その断面において良好な状況を確認することはできなかった。それでも、東西壁においてはその可能性を指摘することはできた。いずれにしても、その北隣で確認された石堤状遺構はみられないと判断してよからう。なお、この東西壁における堀は明瞭であった。

後円部採土跡

本採土跡は、後円部西側のやや前よりあって、裾から墳頂方向へ約8m前後・最大巾15m前後の範囲を有する。

本断面観察においては、その全域にわたって地山を認めるまでにはいたらなかったが、南よりの東西壁においては地山のうえに褐色土（含礫褐色土）と黒色土の堆積があって、旧表土層としてよいものであった。こゝでは、地山のうえに若干の旧表土層を残して墳丘の盛土が積みあげられたといえる。北よりの南北壁においては、こうした地山を明確にすることはできなかったが、それでも旧表土といえる褐色土・黒色土の存在は確実であった。

こうした地山・旧表土のうえに、部分的な変化を含みながらも70~80cmから1m前後を測る黒色ないしは褐色土からなる厚い土層が積まれ、さらにこの上に小ブロックに識別し得る墳丘盛土が観察された。こゝでの特徴的事実は、こうした墳丘盛土の積みあげにおいて、その墳頂部ちかくではかなり下部にいたるまで多くは黄色を呈する土層（黄褐色土）を意図的に選んでいるらしいことであった。すなわち、墳頂ちかくの下部では黄褐色土が多く、その外縁部では暗褐色土ないしは黒褐色土の積みあげがみられたのであった。また、確実と断言し得る状況ではないが、こゝではそれらの黄褐色土ついで外縁の黒暗褐色土を積んでその上部に移るといえる堆積法を採用したようで、前方部にみられた手法との相違がめだつものであった。いずれにしても、いわゆる俵積み法は探っていないかった。

なお、本南北壁の一部では、旧表土層から数十cmほど上部に一群をなす礫群があって、墳丘築成のうで一定の役割を果たす何らかの遺構の可能性も思わせたが、その性格を明らかにするまでにはいたらなかった。こゝでは盛土内に含まれた礫群の一部と理解しておくことにする。

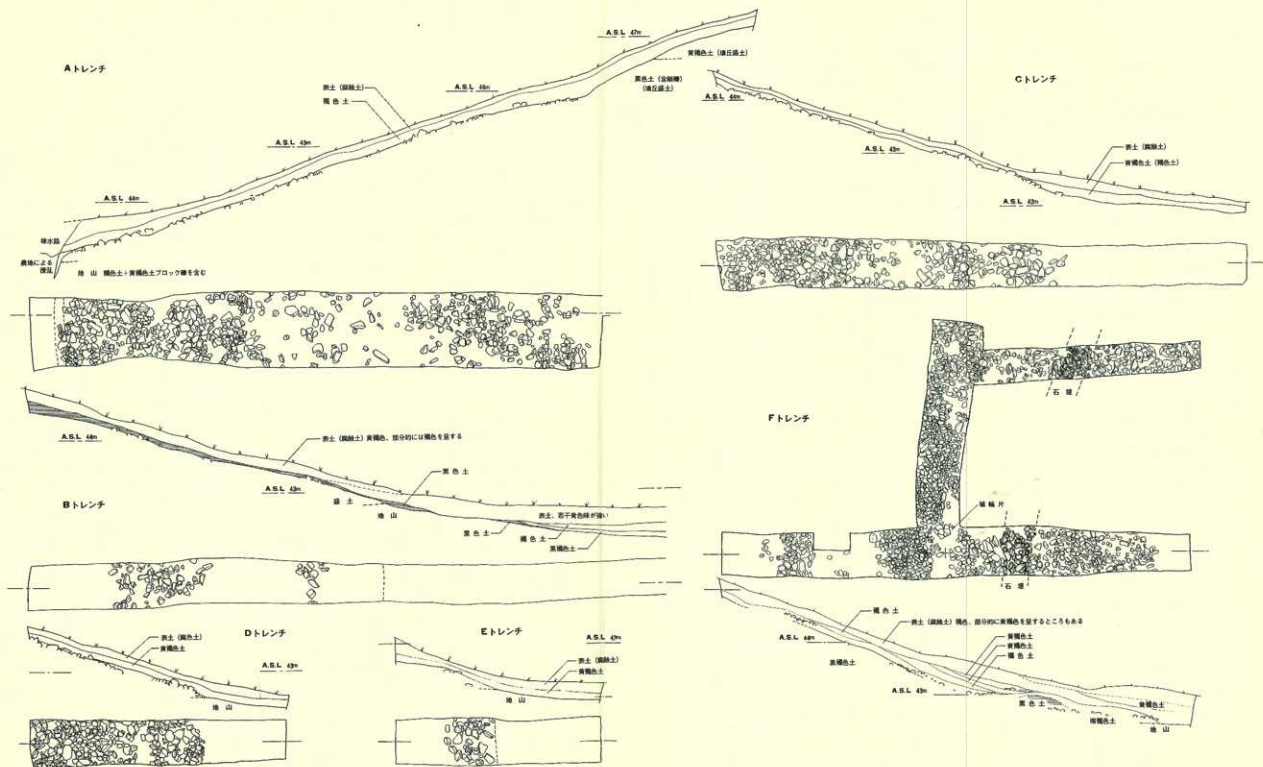
墳丘表面における葦石の存在についても、かなり古い時期的な採土跡の断面観察であるためか明瞭ではなかった。よって、本断面によって、後円部西側の葦石について論ずることは避けたい。

墳丘裾については、その南端部で旧表土上にみられた盛土末端を認めておき、北端部では耕作により破壊されて数mほどの延長が推定された。

墳頂部発掘跡

本発掘跡は、後円部墳頂のはゞ中央に位置して、2.3×2.1mほどの楕円形を呈し深さは現況で1m数十cmを測った。この発掘跡は保存のために埋め戻して復元することにしたが、その際に、断面観察によって、あるいは主体部の痕跡を発見し得るかも知れないと判断して若干の清掃作業を試みた。この作業によれば、本墳頂部はかなりの回数にわたる発掘を受けていることが確実であった。すなわち、現発掘跡のすべての壁にはより古いものとみなし得る攪乱拉の断面が観察できた。こうしたなかで、あるいは主体部かも知れないといえる断面が、南・西壁の深さ90cmほどに底面をもち巾80~90cmを有したが、それらも検討によれば確実ではなかった。やはり発掘跡の一つといってもよからう。

本墳からはかつて獣形鏡が出土したと伝えられているが、それもこうした発掘のいずれかによるものであったろう。なお、現発掘跡の埋め戻し作業によれば、その周辺にはかなり大量の粘土塊が散乱する状況にあった。これによって、本墳の主体部は粘土部という伝承を証明し得たと判断してよからう。



第6図 A～Fトレンチ実測図

V ま と め

1. 墳丘について

測量調査および測量図の検討の結果瓢箪古墳の規模は以下のとおりであるということが理解できた。全長63m、後円部径37.8m、後円部5m、前方部巾25.2m、高さ3.5m又墳丘外部施設としては葺石を墳丘全面に葺いており、さらに円筒埴輪をかなりの範囲に樹てているらしい事が判明した。周溝は不明瞭ではあるが、巾7m程のものが巡っており、深さは極く浅いものが考えられる。

墳丘は黒色土、黄褐色土による全面盛土で築かれており、後円部の墳頂部は黄褐色土のみを意識的に積んでいるらしいことが推定された。

墳丘の特徴は後円部に比較し前方部が未発達であり、古式の古墳の様相を呈しているといえることができる。また平面企画はBC:CP:PDの比が6:2:2の比率を持ったことが判明したが、遠江における中期の古墳にはそうした比を示す古墳の存在は今のところ不明である。

2. 古墳の年代および性格について

年代について — 瓢箪古墳の年代はそれを直接示す資料が少く、にわかには決め難いが、それを示すと思われる諸要素を列挙し検討してみたい。

①古墳の平面企画は先に述べたように6:2:2の比率を示しており、後円部に比較し前方部が未発達である。これは測量図でも同じ傾向を示しており、前方部の高さは後円部よりかなり低い。こうした傾向は古式の古墳の特徴として古くから指摘されていることである。

②古墳の立地は台地の沿縁にあり平地あるいは台地の奥まったところに営まれる古墳に比較して古式の古墳に共通な占地をしているといえることができる。

③古墳は全面に葺石を持ち円筒埴輪をめぐらしている。遠江において埴輪を持ち、葺石を施した古墳は磐田市松林山古墳に始まっており前期古墳から存しているといえることができる。しかし6世紀初頭と推定される磐田市瓢箪古墳(註15)も墳丘に円筒埴輪をめぐらし、葺石を葺いている。これが遠江における埴輪をめぐらした古墳の下限を示すものと考えられる事ができる。従って墳丘に埴輪をめぐらすことは4世紀末～6世紀初にまで及んでおり、直接ここでの年代決定の資料とはならない。

④明治30年代の発掘によれば古墳の主体部は粘土槨であったとされている。先に述べたように発掘された原氏宅には現在でも朱のついた白色粘土片が保管されている。粘土槨の規模は現在墳頂部にある発掘孔の長さ以上ではなく、最長で3m以下と思われ、静岡県史の記載にあるとおり2m程度と思われる。従って粘土槨では比較的短いといえることができる。主体部が粘土槨の古墳は遠江では多数認められるが使用している粘土の量が多く、棺全体を文字通り粘土で覆っているものが古く、木棺の両端を粘土でおさえる程度のものが新しいようである。県史の記述によれば、主体部の粘土槨は短いというもののかかなりしっかりしていたことが推定される。

⑤発掘により鏡2面(獣形鏡)、勾玉2個(水晶製1、硬石製1)、管玉(碧玉製)、鉄剣、鉄鏃等が出土している。(註16)

⑥瓢箪古墳より採集されたといわれる異形壺形埴輪が静岡大学に保管されている。(註18) 大きな複合口縁を持った、バランスのあまり良くない器形を呈する埴輪である。複合口縁の壺が盛行す

るのは言うまでもなく古式土師の五領期であるが、和泉期の古い部分には一部は残るかも知れない。和泉期であるとすればその古い部分でありいずれにせよこの古墳の年代がかなり古い事を示す要素であろう。

以上の6点を検討した。いずれも確定的なものとはなり得ないが、多くはこの古墳が5世紀前半を降るものでないことを示していると思われる。さらに追加すれば従来の調査においても、今回の調査においても須恵器あるいは須恵質の埴輪は採集されていない。以上のことよりこの古墳の年代を一応5世紀前半に求めておきたいと思う。

性格について 先に述べたように和田岡原には各和金塚、吉岡大塚を含める3基の大形前方後円墳が存している。原野谷川流域ではこの他にも有力な古墳として画文帯神獸鏡を出土した岡津奥の原古墳がある。すでに削平されており詳細は不明である。同範鏡が多数発見されているこの鏡は、東海地方においては前方後円墳あるいは有力な円墳に副葬されている(註17)ことを考えると、岡津奥の原古墳が前方後円墳(註18)であった可能性は大きい。これらの古墳の示す年代あるいは相互の位置関係から見てこれらの前方後円墳が原野谷川流域を支配した首長達の墓であることはまず誤りがなかろう。和田岡原の前方後円墳(註19)は5世紀初頭より各和金塚古墳—瓢塚古墳—吉岡大塚古墳—岡津奥の原古墳と一系列に続いたこの地域の首長墓であったと思われる。瓢塚もその内の一基であり5世紀前半におけるこの地域の首長墓であったものと思われる。

- 註1 昭和47年静岡県遺跡分布調査によれば原野谷川流域で古墳67基、横穴16群が確認されている。
- 註2 内藤兄他 『春林院古墳』春林院古墳調査委員会 1966. 8.
- 註3 大谷純仁、平野和男、向坂綱二、山村 宏 『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』静岡県教育委員会 1971
- 註4 向坂綱二 『掛川市本村横穴墳A群発掘調査概報』
宮本豊彦、植松章八 『掛川市本村横穴墳B群発掘調査概報』
大谷純仁、寺田義昭 『掛川市向山古墳（第一号、第二号）発掘調査概報』
『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県教育委員会・日本道路公団 が上たものであるが他に平野和男、向坂綱二、大谷純一 『掛川市城山横穴墳調査報告書』掛川市教育委員会 1964がある。
- 註5 高橋建自他 『静岡県史』 昭和5年
- 註6 上田宏範 『前方後円墳における築造企画の展開』『近畿古文化論巧』1963
" 『前方後円墳』 1969
" 『前方後円墳における築造企画の展開Ⅱ』『樞原考古学研究所論集』1975
- 註7 甘粕健『前方後円墳の研究』—その形態と尺度について—『東洋文化研究紀要第37冊』1971
- 註8 前方部西側は海拔42.5mと43mの等高線が非常に接近しており、また外見上の墳丘裾も墳丘内に大きく入り込んでいるように見える。またFTで検出された礫群も外見上の墳丘の外側であり、墳丘裾を中心にこの部分が変形していることを感じさせる。これに対し東側は外見上の墳丘裾と葺石の終りも一致しており、保存状態は良いと思われる。
- 註9 光明山古墳、天竜市山東の丘陵上に立地する大形の前方後円墳であり、墳丘裾より須恵質埴輪が出土している。遠江考古学研究会により実施された測量調査によれば全長77m、後円部径42m、前方部巾49mであり平面規格はBC:CP:PEが6:2:3の比を示している。遠江における代表的な中 antiquity 古墳である。
- 註10 平野吾郎『小笠郡小笠町舟久保古墳の調査』『静岡県埋蔵文化財調査報告』静岡県教育委員会 1977
丘陵上に位置する前方後円墳であり、測量調査によれば全長49m、後円部径26m、前方部巾25mである。前方部が削平されており、前方部墳頂部の位置が明らかでないが、前方部の巾が広く光明山古墳と良く似た墳形を呈している。
- 註11 平野和男『磐田市新貝17号墳・18号墳・城之崎丸山古墳調査概報』・磐田市教育委員会1972
- 註12 後藤守一他 『松林山古墳』静岡県磐田郡御厨村郷土教育研究会 1939
- 註13 岩井克允 『各和金塚古墳について』『水垂二ツ池古墳群』掛川市教育委員会 1974
各和金塚古墳は昭和48年主体部が空堀され、多量の鉄製品が掘り出され、墳頂部に散乱していた。採集された鉄製品は浜松市立博物館で一応の整理がなされている。遺物については整理を実施した川江秀孝氏の観察に基づいている。
- 註14 小野山節 『五世紀における古墳の規制』『考古学研究』63号 1970
小野山節 『古墳と王朝の歩み』『古代史発掘』6 1975

註15 長田 実、平野和男 「甕塚古墳発掘調査概報」 磐田市教育委員会 1960

註16 甕塚古墳の埋葬主体については明治30年に発掘された時の調査が静岡県史に記載されている。それによれば粘土椁でその範囲は長さ2m、巾1m程であったと推定している。

今回の調査に関連した後円部中心の発掘断面を観察したところ壁面に粘土の痕跡は全く残っておらず、先の発掘により主体部は完全に破壊されているものと思われる。従って粘土椁の長さも発掘地の巾（不整形円形である径3m）以下であり、県史の記載による程度であったと思われる。また調査終了時に墳頂部に積まれている土で発掘坑を埋戻したところ積土の下部から粘土が多量に出て来たことも先の記述を裏づけるものであった。発掘調査によって出土した資料は幸なことに原三郎氏宅に保管されており保存状態も良く、ほぼ当時の状態に近いものと思われる。

県史の記載のとおり鏡2面、勾玉1（滑石製）、管玉（碧玉製）が保管されているが、甕塚古墳出土と伝えられている箱中に前記以外に水晶性の大型の勾玉（長さ48mm、太さ16mm）、碧玉製管玉（長さ35mm、太さ14mm）、剣先1、鉄鏃3、および現在もあざやかな朱色の残る白色粘土塊2が含まれている。県史に「刀子の柄」と記載があるが、今回は見えなかった。しかし短時間遺物を拝見しただけであるのであるいは見落しがあるかも知れない。再度検討の機会を持ちたいと思う。また大型の勾玉は県史記載の「行方不明となった」「美麗な勾玉」であるかも知れないが「硬玉製」であったとすると素材が異なるようである。

所有者の原三郎氏に伺ったところ甕塚古墳出土遺物として一箱で大切に保管されてきたこととであり、同時に当家に他の古墳の遺物が保管されていないこと等より、これらが一括甕塚古墳出土遺物であろうと思われる。

出土遺物の実見と写真掲載を許可していただいた原三郎氏に末筆ながら感謝の意を表するしだいである。

註17 澄田正一 「伊勢湾沿岸の画文帯神獸鏡について一備田川流域の調査を中心にして一『近畿古文化論攻』 1963

註18 内藤 晃 「古墳文化の地域的特色」一東海—『日本の考古学Ⅳ』1966 及び前記「春林院古墳」に写真が載っている。

註19 原野谷川流域にはこの他に全長100mを越すといわれる下山古墳があるが、墳形が崩れており、詳細は明らかでない。伝えられるとおり大型の古墳であるとなれば、中期の古墳であろうし、当然この地域の首長墓と考える必要があろう。首長墓であるとなれば各和金塚古墳より岡津奥の原古墳というこの地域の首長墓の系譜に連なるものであろうが、地理的に前記の古墳群とは離れており本質の地が異なるものと思われる。従って下山古墳の主は和田岡古墳群の被葬者に対し、一系列のものではなく一時期首長に就いたいわば傍系の者と言うことができるかもしれない。しかし下山古墳が伝えられるとおり大規模な古墳であるか否か、墳形およびその立地の上からも異論があり検討の必要があるかも知れない。

図
版
I



周辺景観図 1 (南西から)



周辺景観図 (東から)

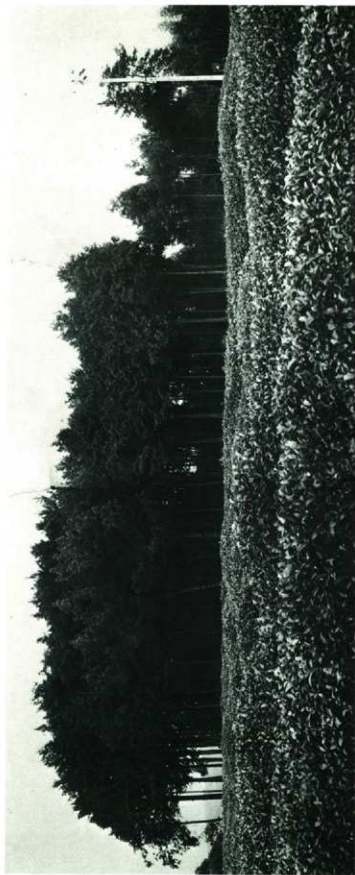


古墳遠景



古墳近景（東から）

図版Ⅲ



古墳全景（西から）



前方部（土取りあと）



後円部（土取りあと）



墳頂部 盗掘孔



墳頂部 (盗掘孔埋戻し後)



前方部



前方部 墳丘断面

図版Ⅶ

Ｃトレンチ



Ｂトレンチ



図版Ⅷ

サレンディ
D117



サレンディ
E17



図
版
Ⅸ



Aトレンチ

図版 X

F-2 トレンチ



F-1 トレンチ



図版 XI

F-1 トレンチ



F-3 トレンチ

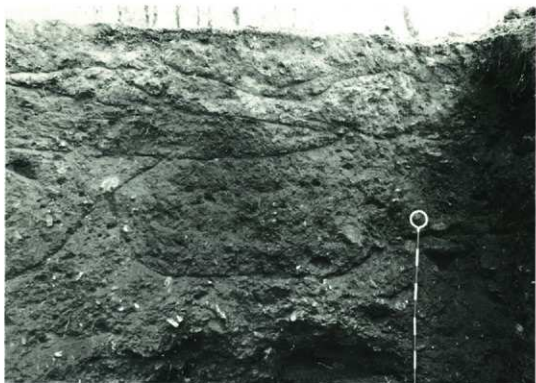




F-2 トレンチ



F-1 トレンチ



墳頂部盗掘孔断面



埴輪出土状態（F-1 トレンチ）



調査風景 1



調査風景 2



伝瓢塚古墳出土変形獣文鏡その1



伝瓢塚古墳出土変形獣文鏡その2

瓢塚古墳測量調査報告書

昭和 54 年 3 月 24 日

編 集 静 岡 県 教 育 委 員 会

発 行 掛 川 市 教 育 委 員 会

印 刷 株 式 会 社 三 創

TEL (0542) 82-4031

